第１２回　幸福師匠！おーえん会（報告）

令和６年 12 月７日（土）に岐阜市神田町の喫茶店星時で**「登龍亭幸福・旭堂鱗林二人会」**が開かれました。今回は９人のメンバーが参加しました。

〇登龍亭幸福師匠の一席目の落語は、『相撲』でした。
あらすじ：★この噺の主人公は若い力士で、初めての土俵入りを果たします。彼は期待と緊張の中で一番一番を戦うものの、「何とか次は勝利する」と言い続けて１番勝負から 10 まで連敗してしまいます。力士仲間たちや師匠から激励を受ける中、彼は次の場所でも再び挑戦しますが、またもや負け越してしまいます。そして、次の岐阜地方巡業でも奮闘しますが、残念ながら大敗してしまいます。負けても諦めずに挑戦し続ける姿を見せるのは、わが校の『やりぬく精神』と同じで、心打つ話です。さて、「落ち」はどうなるのでしょうか。自らの努力を信じ続け、再び立ち上がります。この話の最後は、子供相撲で「おまけして負ける」ということでした。子供への優しい配慮でしょうか。努力と結果は付き物ですが、現実は厳しいですね。
（あらすじが、噺と違うよ!と思われた方は、ご一報ください。例の如くうろ覚えで申し訳ないです。）

〇登龍亭幸福師匠の第二席目の落語は、『三代目若旦那（さんだいめわかだんな）』でした。
あらすじ：★美しい奥さんの大棚（おおだな）に婿入りした旦那が、若くして次々と亡くなるという話です。彼女と結婚した最初の旦那は、結婚して間もなく亡くなってしまいます。庭師が障子越しの若夫婦が昼間からイチャツイテいる現場を目撃していました。
「あなた、ご飯を召し上がれ」
ご飯が盛られた茶碗には白魚のような手が添えられています。指と指が触れ、目の前には絶世の若妻、その美しい顔、目と目が合い、辺りには誰もいません･････。（昼間から何やってんね!!!）。毎日、若旦那は顔を合わせると「腰が痛い」と口癖が返ってくる。そして若旦那が若くしてぽっくり死んでしまうのです。さて、旦那のいない大棚は放っておけず、その後、再婚した二人目の旦那も同じように早死にします。そして三度目の旦那もまた、美しい奥さんと結婚し、夜の夫婦生活が原因で次々と若死にします。
　ある日、庭師は女将さんから
　「なぜ３人も続けて早死にするんだね。お前さん何か知っているだろ!!」
　と聞かれます。庭師には、障子越から垣間見た若夫婦の姿が思い浮かび出してきます。

「おい、お前、飯を盛ってくれないか」
「なんだよね、いつもとなんか違うね、話を聞かせてくれるのかね!」
女将は、ご飯をお櫃から茶碗ごとしゃくったり、しゃもじで天井めがけて投げ上げたり、山高く飯を盛ったりと、嫌々でも応対してくれます。
「はい、お前さん!!」
「もう少し柔らかい声で言ってくれないか」
「なんですよ、お前さん!!」
差し出された茶碗の下には、あの美しい奥さんの白魚のような指!!!??。
「こりゃ!!!おれは、長生きするな!!!」

〇旭堂鱗林師匠の講談は『応挙の幽霊画』でした。

はじめに：★円山応挙は、江戸時代中期（1733(享保 18)年の生まれ、1795(寛政 7)年没。今に続く円山派の祖）の有名な絵師で、特に「足のない幽霊」の絵の元祖として有名です。応挙は、幽霊の足を描かないことで、却って幽霊の浮遊感や不気味さを強調することができると考えました。円山応挙がまだ修行中だった頃の『応挙の幽霊画』という噺しは、これとは別の話と言われています。

あらすじ：★京の絵師円山応挙は、ある日、友人から「幽霊画を描いてほしい」と頼まれます。しかし、応挙はこれまで幽霊画を描いたことが有りません。どのように描けばよいか迷っていました。日本全国を巡り、ある時とき長崎の街へ来ました。遊郭で宵のうちは大いに騒ぎ、酒の勢いもあってその夜はぐっすり寝込んでしまいました。夜中、手水に行くと「ウーン、ウーン」といううめき声が聞こえてきます。すると粗末な部屋で、声を出して寝ていたのは、青白い顔して呻いていた花魁でした。声を掛けると、彼女は幼い頃にどこかの天神様の境内で遊んでいるところ人買いに誘拐されて、人の手から人の手に渡り、あちこち売られていくうちに、この長崎の遊郭に辿り着いたと言います。さらに聞くと、この遊郭に勤めてから一時は売れっ子になった時期もあったが、今ではこのように病気で店の者から邪魔者扱いされ、ひどい仕打ちを受けて、医者にも見てもらえないでいる。生国や親の事さえ知らない。身元の手掛かりになるものはこれしか無いと、見事な唐錦の布の切れ端を応挙に差し出す。花魁は小さい頃に母親に作ってもらったと話す。応挙はそんな花魁の姿を下絵をさらさらと描いて、モデル代と言って治療用を含め三両の金を与える。

翌日宿屋に泊った応挙は、夜中、枕元に両手を着いて挨拶をする綺麗な花魁の姿があった。夢で見た花魁はやつれた姿ではなく、健やかな顔をしていた。翌朝すぐに遊郭へ行く。女中に尋ねると花魁は昨夜亡くなったと言う。花魁の墓は土饅頭があるだけで花一輪線香一本もない。寺の住職に事情を話し、永代供養料を収め、石塔を建て、懇ろに弔った。

久しぶりに京都の街へ戻ってきた応挙は、馴染みの茶屋を訪れる。応挙は旅の最中に、花魁の身元の手掛かりを探すが一向に分からない。茶屋の夫婦は証文の請け判が元で出来た七十両という借金を返せず近々夜逃げをすると言う。応挙は夫婦のために「福の神の絵」を描こうと思い立つが、幽霊画ばかりで最近そのような絵は描いていない。いっそのこと誰も見たことがないような恐ろしい幽霊画を描こうと思い、長崎で描いた下絵に手を入れ、完成させる。夫婦の元に持って行くと夫婦は怖がるが「これは福の神だ」と言い張って絵を渡す。怖いもの見たさで、この幽霊画が評判になって店には客が詰めかけるようになる。商売繁盛で店も大きくなる。

久しぶりに応挙が夫婦の元を訪れる。今度は以前の絵の続きと言って新たな絵を差し出す。夢で見た元気で綺麗な頃の花魁を描いた絵だった。お礼として夫婦から先祖代々伝わる羽織を見せて貰う。この羽織には裾の一部分が無い。はっと思った応挙は長崎で花魁から受け取った唐錦の布を当ててみると切り口がピタリと一致する。夫婦はかつて大坂の天満天神のそばに住んでいた時分三歳になるおみつという娘が突然行方知れずになってしまったという。応挙は幽霊画に描かれているのはその娘だと告げ、長崎・巴楼での出来事の一部始終を話す（ちなみに、夫婦は成長した花魁を見ていない）。夫婦は驚き、また絵を前にさめざめと泣き、剛毅な応挙もまたもらい泣きするのであった。😊

（参考：神田香織「講談るうむ（http://koudanfan.web.fc2.com/index.html）」

参考情報：★大阪中之島美術館（大阪市）は、江戸時代の画家、伊藤若冲と円山応挙が合作した一組の屏風が見つかったと発表した。若冲がニワトリ、応挙がコイとそれぞれが得意な画題を描いており、同館で 2025 年 6 月から始まる展覧会「日本美術の鉱脈展　未来の国宝を探せ！」に出品される。

見つかったのは、若冲が 1790（寛政 2）年以前に竹とニワトリを描いた「竹鶏図屏風」と、応挙が 1787（天明 7）年に梅とコイを描いた「梅鯉図屏風」。同じサイズの金屏風に墨で描かれ、対になっている。伊藤若冲と円山応挙が合作した一組の屏風。

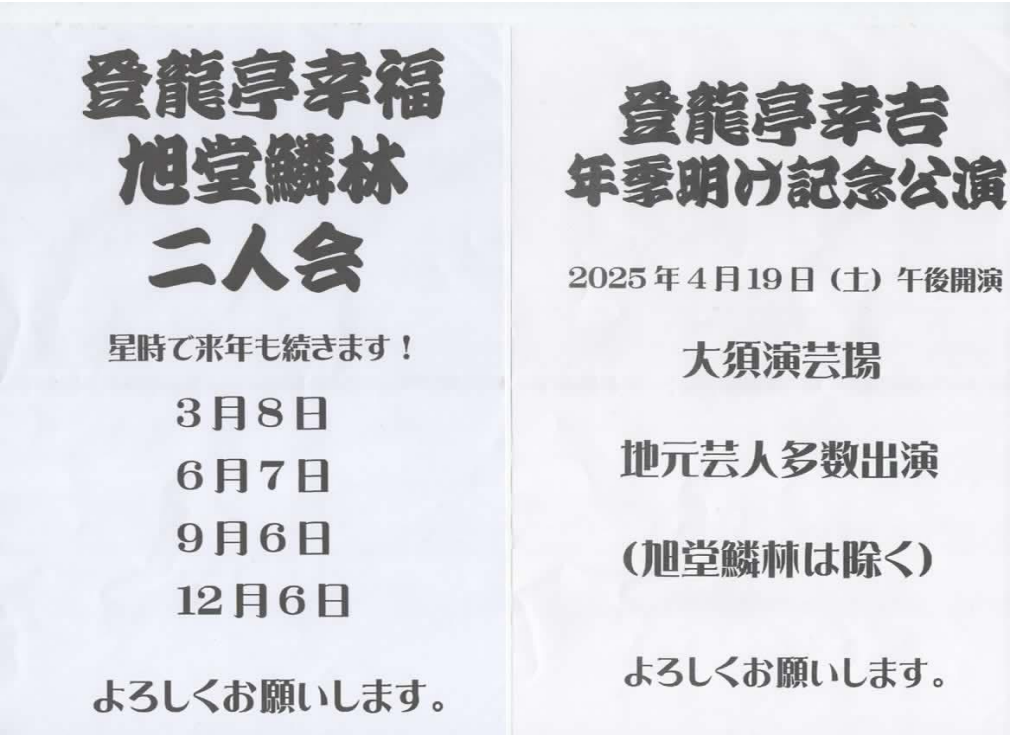
明治学院大の山下裕二教授によると、今回のような合作が見つかるのは初めてで、制作された時期に応挙が若冲を訪ねた記録があるが、詳細は分かっておらず「当時の京都画壇でナンバーワンとナンバー2 を占めた 2 人の接点を示す、非常に貴重な作品だ」と述べた。金箔の材質やつぎ方の特徴が同じことなどから、発注者が一組の屏風を仕立て、2 人に画題を指定して依頼したと推測している。

（参考記事：ユーモラス、かつ鋭く世相を切る、産経新聞朝刊の 1 面コラムです。論説委員が執筆し、現代人が失いかけている日本の心を伝えます。）

〇次回の「幸福師匠おーえん会」の紹介。

落語や講談といった日本の伝統話芸を楽しむため、岐阜東高等学校同窓会では、「幸福師匠おーえん会」を支援しております。岐阜市神田の喫茶店「星時（ほしどき）」で開かれている「二人会」にお邪魔をし、伝統話芸を広めていきます。老若男女どなたでも参加でき、日本の伝統話芸の面白さや意味の深さを知る機会を提供します。

また、幸福師匠の愛弟子「登竜亭幸吉」さんの「年季明け記念公演」が、令和7年4月19日㈯に大須演芸場で開かれます。皆様方の参加をよろしくお願いいたします。

次回は来令和７年3月8日土曜日7時（木戸銭2,000円、物価上昇の折不確定情報です）から星時で開催されます。「幸福師匠おーえん会」ではまとめて席をお取りしておりますので、ぜひ、生（なま）の落語・講談を聴きたいと思われる方はご連絡下さい。

「幸福師匠おーえん会」　代表　坂井至通（12期卒）